



ライオンの生成AIの導入と人材育成について

2026年1月20日

第143回労働政策フォーラム

今日を愛する。
LION

Lion Corporation.

LION DIGITAL
TRANSFORMATION
PROJECT

ライオンにおける生成AI活用

生成AI利用促進に向け、トップダウンとボトムアップで普及活動や用途拡大の取り組みを推進中

経営層のコミット

2022年末
Chat GPT3.5リリース後

生成AIを使わない
という選択肢はない！
これからは全て生成
AIを活用する前提で
考えること！



デジタル戦略部担当取締役
乗竹 史智



代表取締役 兼 社長執行役員
竹森 征之

未来を切り開く
重要なカギの一つが
「生成AIの民主化」
である！

生成AI普及に向けた取り組み

活用基盤の開発

従業員の活用基盤として、チャットアプリ
(LION AI Chat)などを内製で開発し提供



普及活動

社内コミュニティの運営や説明会の実施、活用事例の創出など、
個人から組織まで様々な粒度で活用普及に向けた取り組みを推進

領域別の活用具体化

RAGを活用し、知識・ノウハウの伝承を目的としたナレッジ検索シス
テムなどの内製化

高度な活用人材育成

生成AI活用による組織変革の加速に向けて、AIエージェント開発人材
の育成をスタートし、2025年に100人を育成

普及活動

従業員が自身の業務へ気軽に生成AIを活用できるよう、ツールの導入だけでなく、活用サポートや事例の共有化による活用文化醸成も積極的に実施

ガイドラインの発信

生成AIを適切に利用するためのルールを定めたガイドラインを制定し全社に発信



ユーザーコミュニティ

Teamsでコミュニティを運営



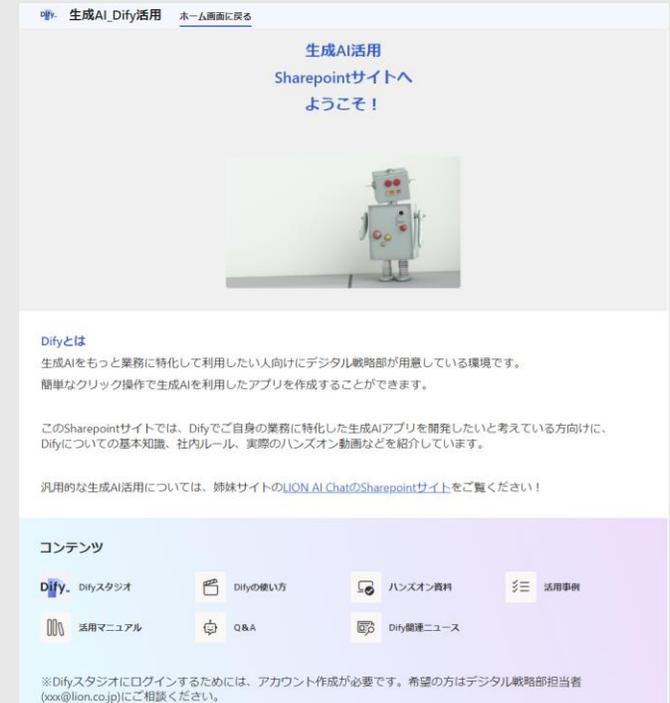
説明会・ハンズオン会

社内事例の共有や初心者への活用をサポートする会をスポットで開催

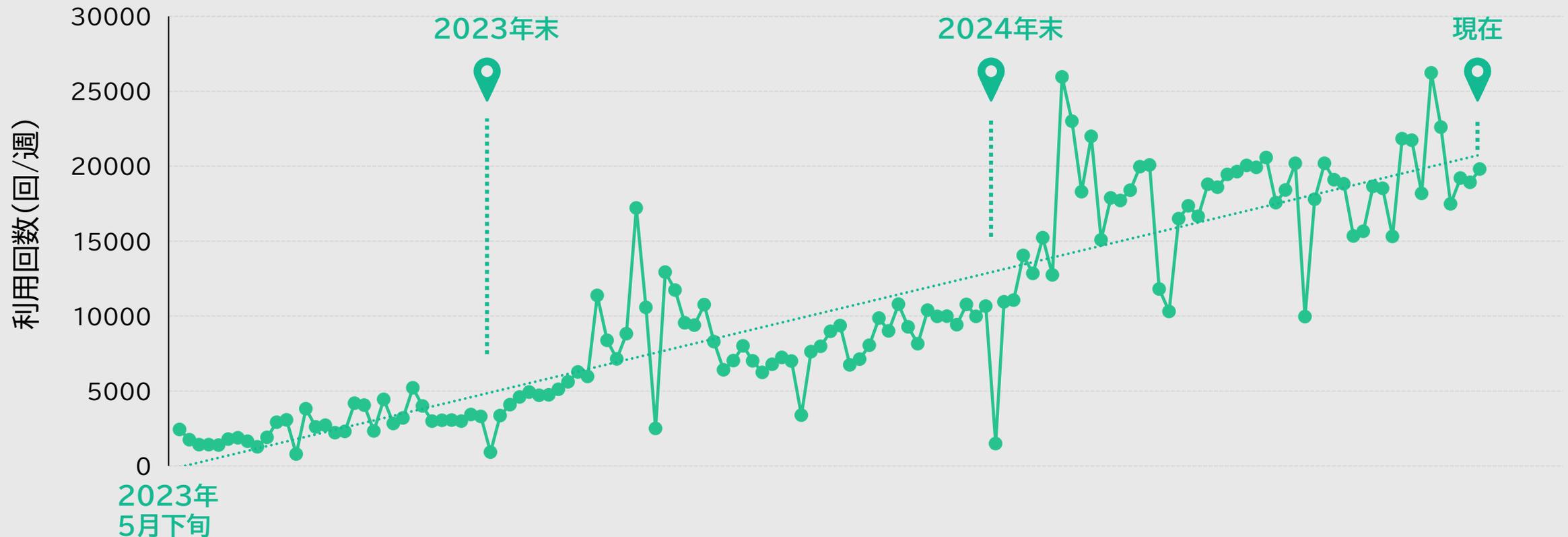


ポータルサイト作成

マニュアル、活用事例、Q&A等のナレッジを集約化



- LION AI Chatの機能開発やガイドライン制定と、普及浸透活動を両輪で実施
- 直近の週間利用回数が**平均20,000回**を突破





領域別の活用具体化 (業務への組み込み)

問題1

様々な媒体・保存先に分散



問題2

属人的に管理されている



あるべき姿



課題

これまでの研究活動において培った技術知見を高度に活用できる仕組みを整備し、
新たな顧客価値創造・イノベーション創出を加速する

RAG※を活用し、自然言語文での問い合わせから社内技術情報を生成する
仕組み(LINK ※※ Chat)を研究開発本部とデジタル戦略部で開発

※RAG: Retrieval - Augmented Generation: 検索拡張生成⇒外部データを検索して生成を補助するAI技術

※※LINK: LION Innovation Network for Knowledge

LION

使い方マニュアル

○会話の設定

検索件数

5 10 15

会話をリセット

○検索対象

- 研究報告書
- 研究報告会資料
- 部所月報
- 部所討論会資料
- 生産技術報告書
- 生産技術会議資料
- 品質トラブル確認システム

LINK Chat -研究ナレッジAI-



こんにちは！このアプリでは生成AIに質問することで、ライオンの研究開発に関するナレッジや資料を検索することができます。以下の点に注意して質問してみてください。

質問例：フッ素のう蝕予防効果を向上させる技術について教えて

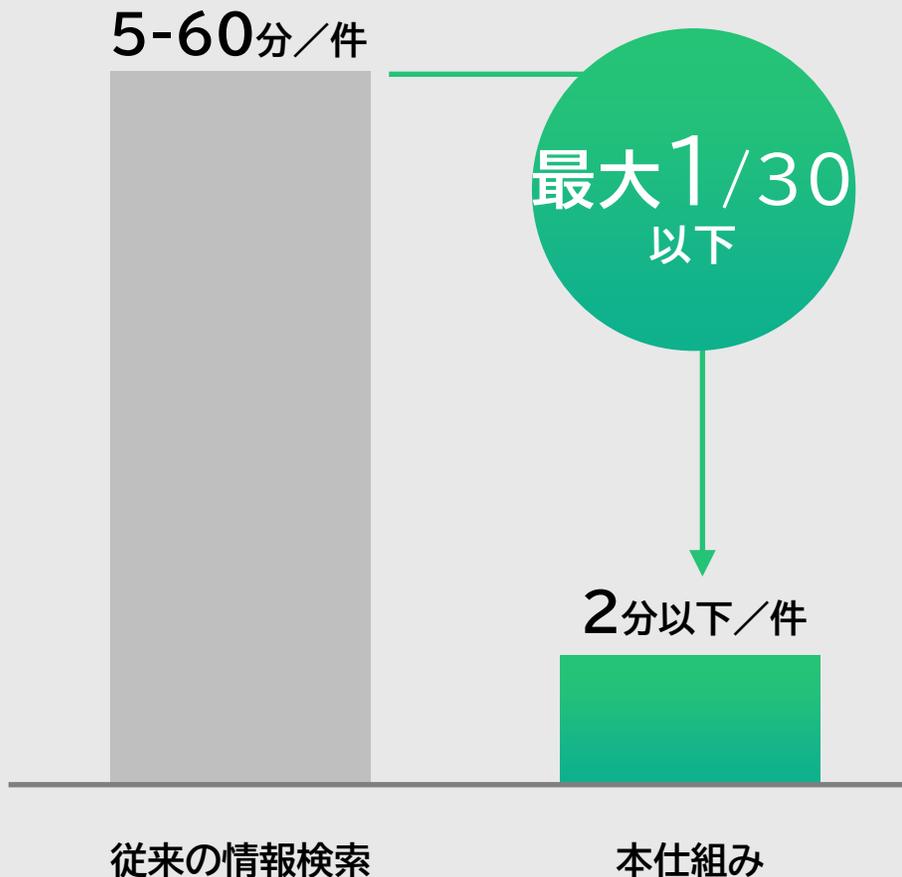
- ・会話はQ&Aの方式で行われます。（話題が変わる際は会話をリセットしてください）
- ・質問はなるべく具体的に記載してください。
- ・曖昧な質問への回答や、1度で網羅的な調査を行うことは難しいです。知りたい事を細かく分けて聞くことをお勧めします。

知りたいことをなるべく具体的に質問してください。



対象とするドキュメント・分野を精査し2024年8月から実装

定量的成果

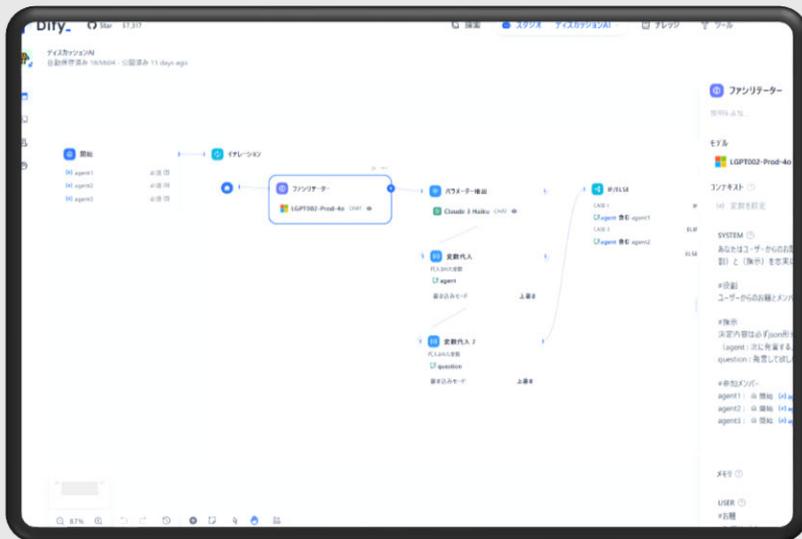


定性的成果

- これまで見つけれなかった情報を抽出できるようになった
- 要約生成により、検索したドキュメントを開封することなく、内容を理解できるようになった
- ドキュメントを跨いだ情報の抽出・整理が可能になった
- 情報が存在しないことも回答されるので、時間が節約されるようになった

開発の工数や難度が低く、非IT部門の従業員でも比較的簡単に活用できると判断し2024年8月から導入

Dify



Difyとは

特徴 1 業務特化の生成AIツール開発

ローコードでAIエージェントを開発できるプラットフォーム。自社データとの連携など豊富な機能がある。



特徴 2 ツール共有による組織全体の生産性向上

作成したツールはチームや部内で共有できるため、生成AI活用の標準化を進めやすい。
【共有場所の例】Teams、SharePoint、LION AI Chat



特徴 3 セキュアな利用環境

AWS Marketplaceからセルフホスト版を購入でき、自社向けのセキュアな利用環境を確立しやすい



ワークフローを活用したお客様への回答文案作成

はやラクHACCP 問い合わせ対応 ①

問い合わせ会社名

問い合わせ担当者名

サポート担当者

Salesforceに記載されているお問い合わせ内容をそのまま記載してください ①

パスワードの設定方法について教えてください。

Workflow Process ②

件名
【 ●●●● 】お問合せありがとうございます

本文
△△△△ (株)
〇〇 〇〇 様

お世話になっております。
●●●●サポートの山岡 晋太郎と申します。

【お問い合わせ内容】
パスワードの設定方法について教えてください。

【回答】
お問い合わせありがとうございます。「●●●●」のパスワード設定方法についてご案内いたします。

【RAGの準備】
 ・過去の問い合わせ対応記録
 ・商品等のマニュアル

①
Salesforceから起案された顧客からの問い合わせ内容や宛先を入力

RAGで関連性の高い過去事例やマニュアルの手順を取得

返信に必要な情報を取捨選択

②
 ・抽出した情報を基に回答の文案を生成
 ・メールのフォーマット(宛先、件名、担当者名など)に成型

③
生成された下書きをもとに、担当者がメールを作成→送信

送信 ③

差出人(M) yamashin@lion.co.jp

宛先(T)

C/C(C)

件名(U) 【●●●●】お問合せありがとうございます

〇〇〇〇株式会社
〇〇 〇〇 様
お世話になっております。
●●●●サポートの山岡 晋太郎と申します。
【お問い合わせ内容】
パスワードの設定方法を教えてください。
【回答】
お問い合わせありがとうございます。「●●●●」のパスワード設定方法についてご案内いたします。
初回ログイン時のパスワード設定
1. ログイン画面で、メールアドレスと初期パスワード（メールアドレスと同じ）を入力してログインします。

用途に応じたUIや機能が備わっており、簡単に高精度なツールを開発できる

The screenshot shows a chatbot interface for 'はやラクHACCP 問い合わせ対応'. The interface includes a header with the company name and a 'New chat' button. The main content area features a form with three input fields: '問い合わせ会社名', '問い合わせ担当者名', and 'サポート担当者名'. A blue 'Start Chat' button is positioned below the form. The interface is powered by Dify, as indicated by the 'POWERED BY Dify' logo in the bottom right corner. A copyright notice '© はやラクHACCP 問い合わせ対応 2024' is visible in the bottom left corner.

はやラクHACCP 問い合わせ対応

New chat

ライオンハイジーン「はやらくHACCP」の
問い合わせ回答メール文案作成

はやラクHACCP 問い合わせ対応

問い合わせ会社名

問い合わせ担当者名

サポート担当者名

Start Chat

POWERED BY Dify

© はやラクHACCP 問い合わせ対応
2024

生コマcreator

New chat

生コマcreator

商品名 商品名

場面設定 場面設定

登場人物 登場人物

役設定 役設定

Start Chat

POWERED BY Dify.

© 生コマcreator 2024

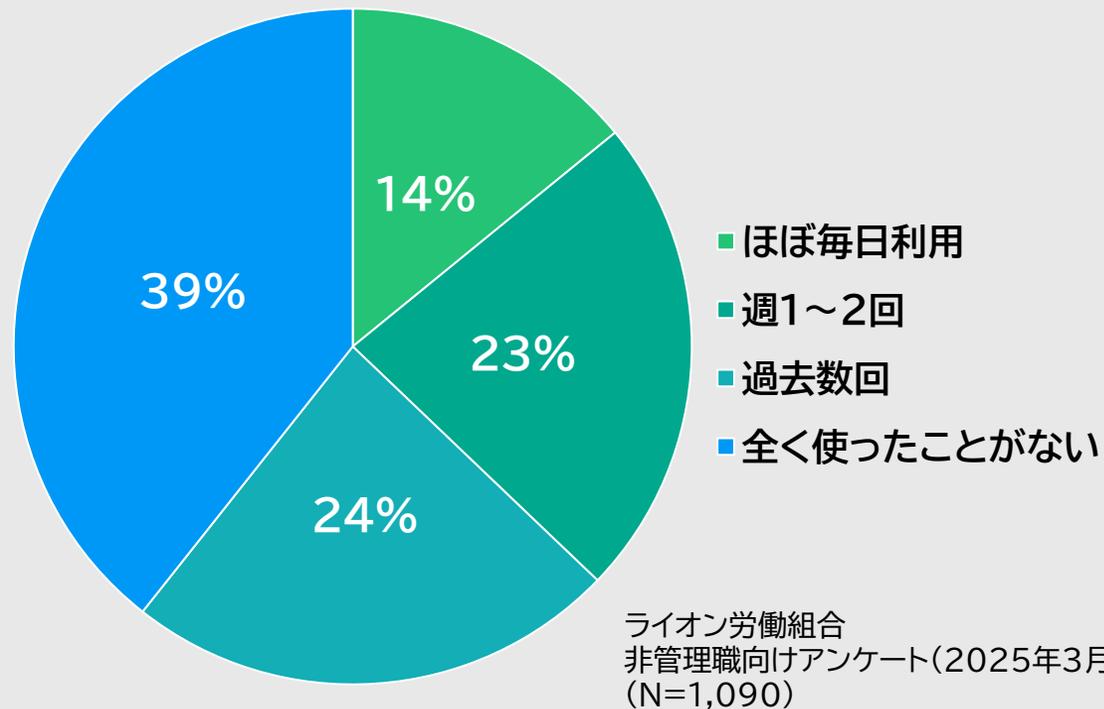
部門	アプリケーション名	内容
クリエイティブ部門	パッケージデザインの印象生成	パッケージデザインの画像に対して、設定したペルソナがどのような反応を示すかをシミュレートし、実際のユーザー評価の事前確認に活用
クリエイティブ部門	店頭棚の印象評価	設定したペルソナが入力した小売店などの商品棚の画像に対してどのように反応を示すかをシミュレートし、ユーザー評価の事前確認に活用
クリエイティブ部門	TV番組内のCMストーリー生成	TV番組の最中に行う生コマーシャルのストーリー構成やセリフを、商品の特徴や過去のCMストーリーのデータを参考に生成
人材開発部門	社内お仕事内容検索	社内の各部署約1000の職務内容を登録し、社内の各部署で求められるスキルや自分のスキルにあった部署をチャット形式で問い合わせできるようにすることで従業員のキャリア設計を支援
マーケティングリサーチ部門	世界の未来推察	ユーザーが入力したニュース記事の内容から当社への将来的な影響や世の中のトレンドの変化など指定した観点での推察する
カスタマーサポート部門	身体案件検知	お客様からの電話などでのお問い合わせ内容が身体に支障をきたした内容か否かを過去の事例をもとに判断する。これにより担当部門の確認作業を効率化する
新規事業開発部門	手書き情報の抽出	手書きで記入された紙を画像として読み込み、指示した項目に対応する文字やチェック欄を自動抽出してデータ化する
全社	論文検索	従来論文検索手法である、単語での検索だけではなく文章でもArxivやPubMedといった文献から論文を探ることができる。また論文の紹介文を日本語で生成することで概要把握を助ける
全社	資料作成	PDFやWord、テキストなどで資料の骨子やまとめたい内容などを与えることで、アイコンやグラフを含むスライドまたはドキュメントを生成する
マーケティング部門	アンケートの自由回答分析	商品のコンセプト調査アンケートの中での自由回答を、回答の傾向をもとに生成したラベルを用いて分類・集計する

LION DIGITAL
TRANSFORMATION
PROJECT

生成AIの「民主化」

社内での生成 AI普及施策を行ってきているが、“未利用39%”（利用者と未利用者が2極化）
ここからは、未利用者をいかに「初回体験」へ引き込み、継続利用へと導くかが課題

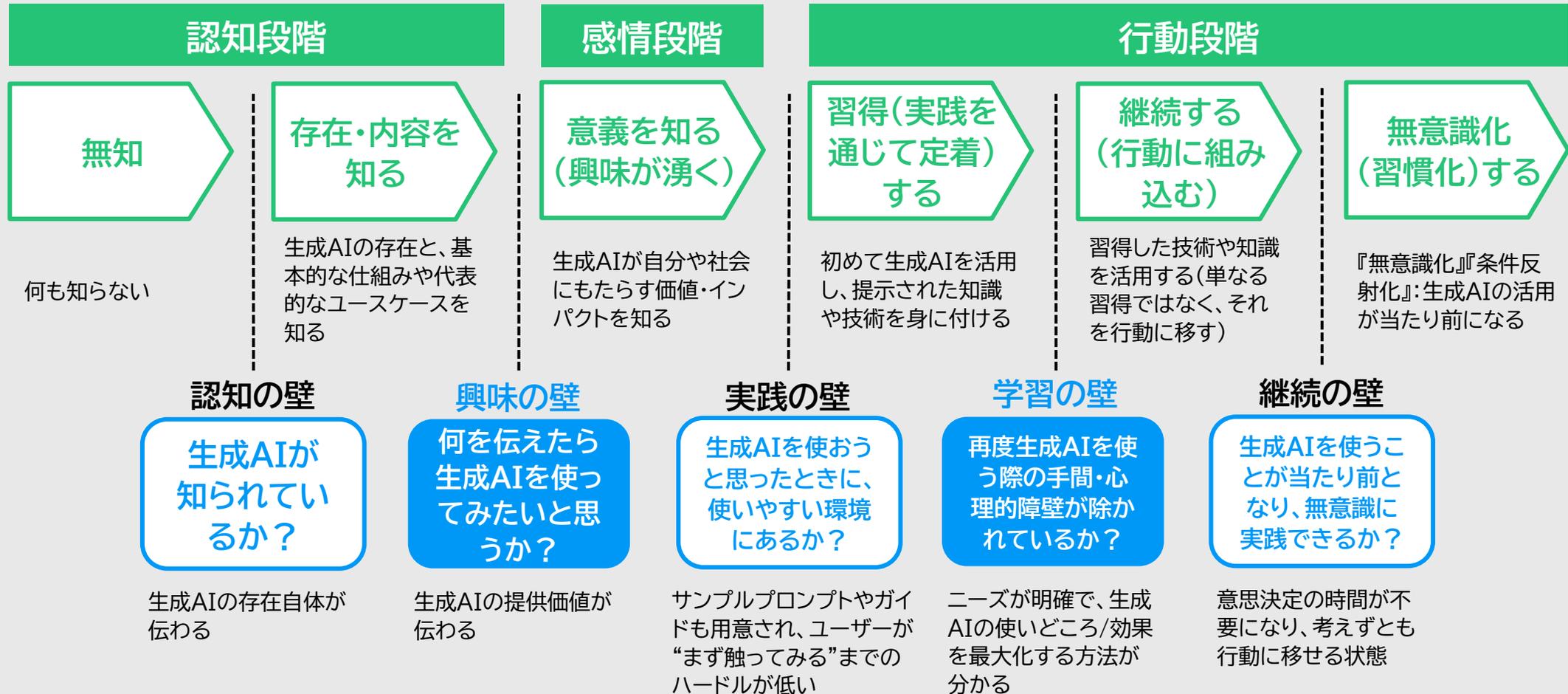
生成AIの活用状況
アンケート



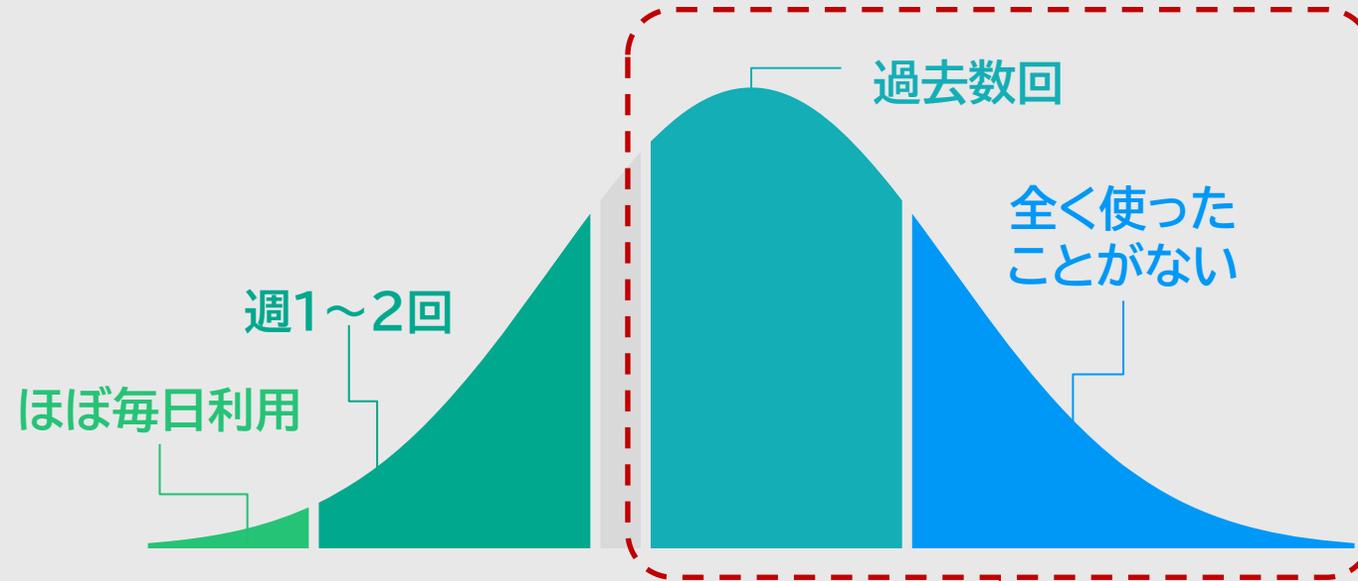
- ほぼ毎日利用、週1~2回は徐々に増えてきているが“全く使ったことがない”層が39%と依然大きい
- “過去数回”のライトユーザーも24%と大きい

- これまでの普及活動だけでは届かない層が明確化し、アプローチ多様化が必須
- ステージごとに異なる“壁”を可視化し、体験→理解→習慣化を段階的に支援する仕組みが必要

生成AI活用の習慣化に向けては、いかに“興味の壁”と“学習の壁”を越えるかがポイント

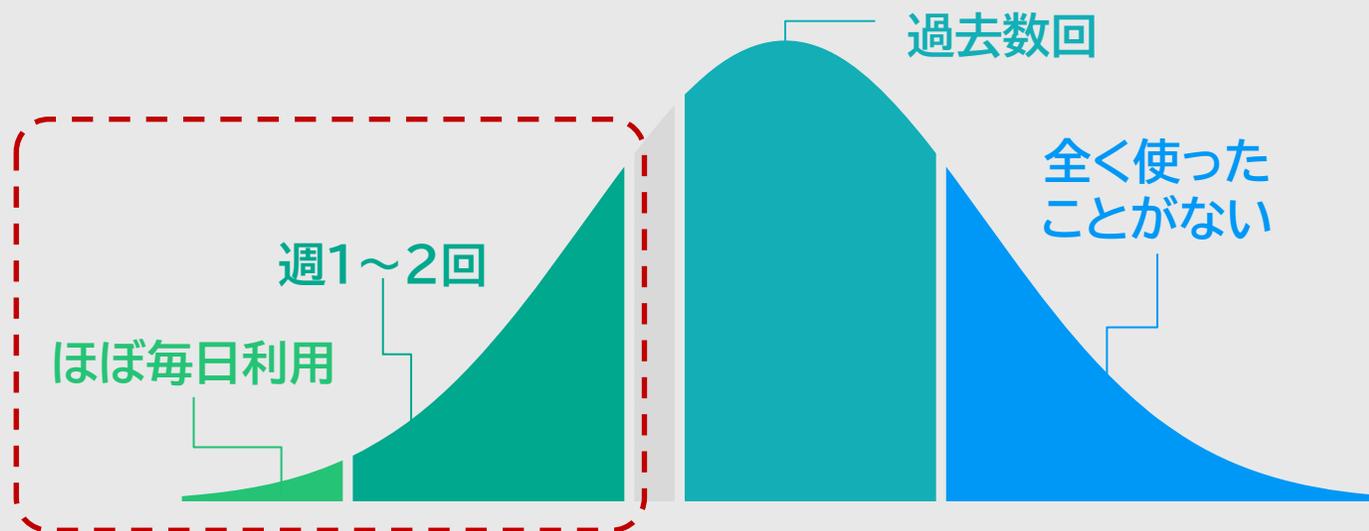


各層に合わせたプログラムを用意し、継続的に社内の生成AI活用人材の質・量ともに高めていく



生成AIの存在や基本的仕組みと代表的ユースケース、生成AIが個人・社会にもたらす価値とインパクト、さらにその効果を最大化する活用方法までを理解してもらう

各層に合わせたプログラムを用意し、継続的に社内の生成AI活用人材の質・量ともに高めていく



業務への活用に関する相談も増えており、「まずは業務に使ってみる」フェーズから、徐々に「業務プロセスに組み込んでいく」フェーズに移行

日々生成AIの活用期待が高まる中で、検証や実装のスピードをいかに維持するか(寧ろ加速するか)が大きな課題となってきた

これまでの成果

生成AI活用の浸透



- 一部の層に生成AIの活用は**当たり前**になってきた
- 生成AIの扱い方や使いどころが分かるように



アイデア/ニーズの増加



- 社内情報との連携をさせたい
- もっと複雑な処理をさせたい
- 毎回の入力をラクにしたい

個人の利用から、**業務全体**への生成AI活用のアイデアが生まれる

**アプリケーション
開発ニーズ増加**

開発が追い付かない

手段/問題点



- DX部門で対応
→ 依頼が多く、時間が掛かる
- 各業務部門でプログラミング
→ 習得に時間が掛かる
- ベンダー依頼・サービス利用
→ 高コストおよびベンダーロックインのリスク

2025年6月、AIエージェント開発人材の育成について、プレスリリースを発信 年内に100名の開発者を育成する方針

AIエージェントでオペレーショナル・エクセレンスを加速 ～社内生成AI「LION AI Chat」がエージェント機能を実装、 ビジネス部門から100名の開発者を年内に育成～

2025年06月24日 経営・財務関連

Share   

ライオン株式会社(代表取締役兼社長執行役員:竹森 征之)は、社内生成AIサービス「LION AI Chat」を大幅にアップデートし、従業員が日常的に行うメール作成、会議議事録の自動要約、コード作成サポートなどに加え、調査を支援する共通業務AIエージェントを新たに実装しました。

さらに、各部門固有の課題に最適化したAIエージェントをビジネス部門が主導で開発するため、ノーコード/ローコードツールであるDify^{※1}を活用し、2025年末までに非エンジニアを含む100名の「AIエージェント開発者」を育成する集中教育プログラムを開始しました。

※1 ノーコード/ローコードで社内データを取り込み、Q&Aボットやワークフロー自動化エージェントを作成、公開できるクラウド型AI開発環境。

■生成AIアプリ開発プラットフォーム「Dify」を提供する株式会社LangGenius CEO Marudan Kiji氏からのコメント

Dify

私たちはLLM(AI)の力を最大限に引き出し、社内業務をよりスムーズで価値のあるものにするを目指しています。これからも機能改善やアップデートを重ね、質の高いAIソリューションを提供し、オペレーショナル・エクセレンスの実現に協力致します。

■育成プログラム参加者のコメント

- 自分ではハードルの高かったRAG^{※2}の検証や新しいツールの使用に気軽に取り組むことができ、世界が広がりました。今後も生成AIを業務に導入していきたいと思います。
- RAG^{※2}の仕組みを実践する中で、ナレッジを「使える形」に整備することの重要性を改めて認識しました。特に、質問の構造化やプロンプト設計といった基盤の整備が、生成精度や活用効果に大きな影響を与えることを実感しました。
- 自分専用にカスタマイズされたアプリを作成して、業務がかなりやりやすくなりました。ほかに作りたいアプリのイメージもあるので引き続きスキルアップを継続していきます。

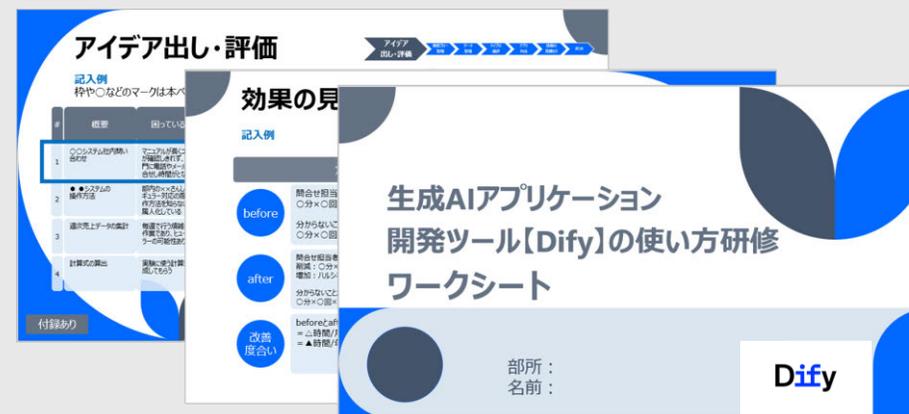
※2 Retrieval-Augmented Generation(検索拡張生成)の略称。外部データを検索して生成を補助するAI技術のこと。

業務課題を自身で設定し、ローコードでAIエージェントを
設計・実装できる人材するプログラムを実施中

開発研修の実施概要

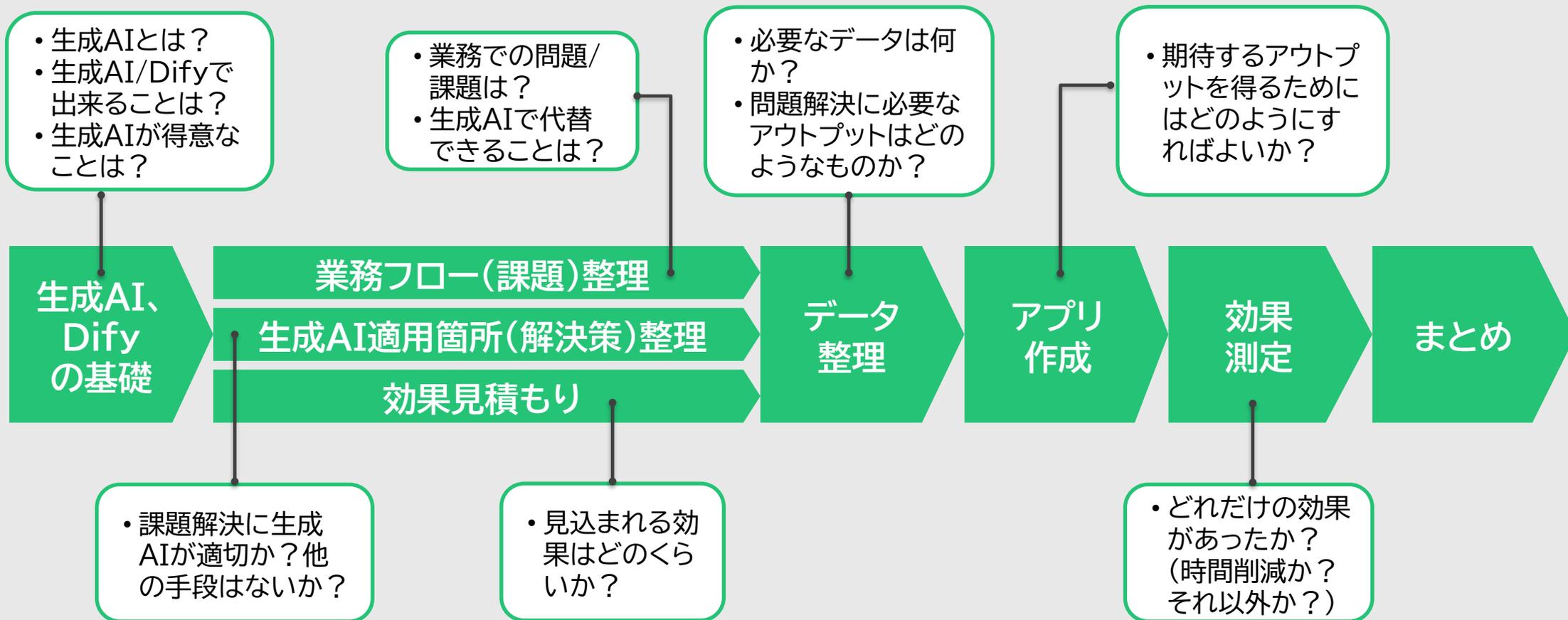
- ◆ 目的: ビジネス部門の従業員が、自らの課題を生成AIで解決できるスキルを習得すること
- ◆ 期間: 第1期は4・5月の2か月間、
第2期は7～9月までの2.5か月
- ◆ 内容: PBL形式で各自テーマを1つ決めて開発にチャレンジ
- ◆ 人数: 1期・2期ともに約40名
- ◆ 応募資格: 普段から生成AIを業務に活用している
- ◆ 参加方法: 手挙げ制

研修コンテンツ例



Difyの開発方法だけでなく、課題整理や業務フローの設計など、DXに必須のスキルもセットで体系的に学べるコンテンツを提供

Difyの使い方だけでなく、生成AIの基礎から課題整理、適用検討、開発、効果測定までを体系的に学び、業務課題の解決を目指す



生成AIの基礎教育の例

生成AI、
Dify
の基礎



■生成AIに向いているタスク・向いていないタスク

生成AIに向いている

自然言語処理	あいまい検索
大量テキストの要約や比較整理	一般的なアイデア出し
会話ログやFAQの自動応答生成	複数資料からの情報統合・再構成
多言語翻訳やローカライズ案の作成	提案書・文章のドラフト作成

生成AIに向いてない

他デジタル技術の方が向いている

ルールが明確な処理(RPAなど)	正確な計算が必要な処理(ExcelやPythonなど)
数字を扱った予測(線形回帰など)	高精度な画像処理・検出(専門モデルによるAI画像解析など)
高速かつ大量データのリアルタイム処理(IoTやセンサー制御など)	

人間の方が向いている

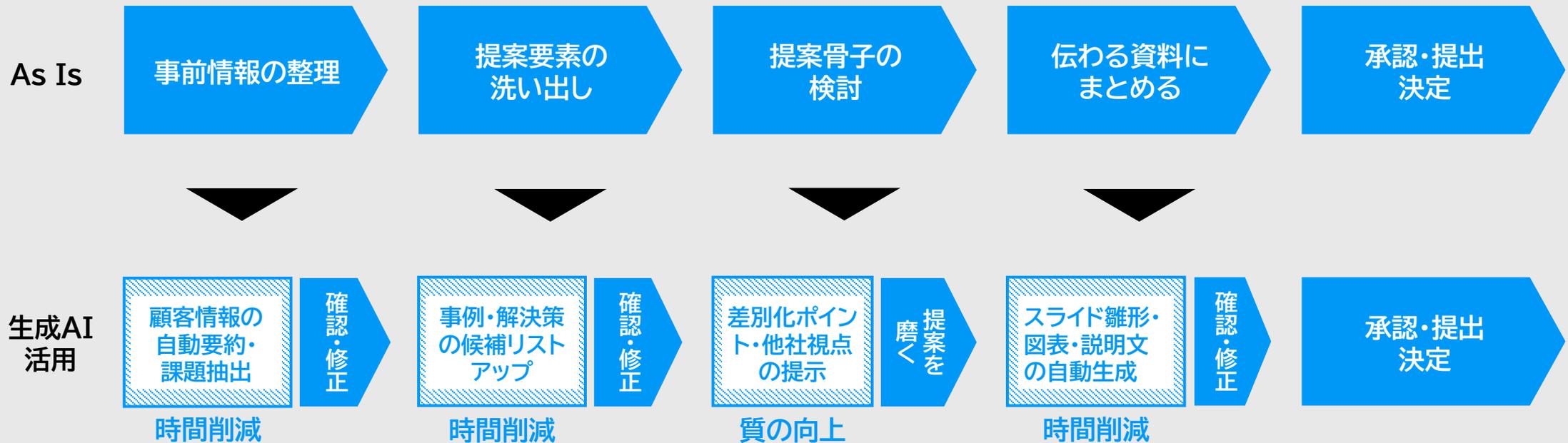
間違えた出力があった際の責任を問われるもの	交渉や対人関係の調整
倫理的な判断	世の中に存在しない新価値の創造
組織や社会的影響を考慮した最終意思決定	長期的なビジョンや戦略策定

生成AIの基礎教育の例

■生成AIで目指す姿:すべての業務がなくなるわけではない



例)営業提案書の作成



部門	アプリケーション名	内容
研究・知財部門	特許抵触性調査の一次スクリーニング	特許の構成内容と自社の仕様成分の合致判断を行う。特許は多言語かつ用語の記載方法ケースによって異なるため人手の確認には時間を要していたが、生成AIを活用することで短時間でのスクリーニングを実現
研究部門	訴求可否判断	法令やガイドラインをもとに、研究成果や製品の効果エビデンスをそのまま訴求できるかを判断。訴求不可の場合はその理由と代替案を提示する
営業データマネジメント部門	取引先マスタ運用方法のスキルトランスファー	システムの運用業務のノウハウ継承を目的とし、問合せを行うと回答に加え、関連するオンラインストレージに格納しているマニュアルなどを表示させる
新規事業部門	新規事業アイデア出し	ランダムまたは自分で指定したキーワードをもとに、新規事業アイデアと10個と各アイデアの分野/ターゲット/解決策を生成することで、ユーザの視点を広げる
法務部門	利用規約の解説	規約文を読み込み、契約上注意すべき点・当方不利の記載・契約違反のリスクの3点についてレポートを出力
デジタル部門	AWSシステム構成図提案	実現したいシステムをテキストで渡すことで、社内のセキュリティ要件を満たすAWSシステムの構成図を生成
デジタル部門	HPコンテンツ作成	過去に作成したホームページのブログ記事などのコンテンツと新たに付け加えたい視点をを用いて、新しいコンテンツを生成
営業データマネジメント部門	店舗名称紐づけ	データ登録する際の生データでは販売店の名称がオリジナルの略称で記載されていることが多く登録するには正式名称に変換する必要がある。略称は多岐にわたるため生成AIを用いることで柔軟な紐づけが可能になる
信頼性保証部門	商品パッケージの新旧比較	製品のパッケージが変更された際に表記に問題がないか、変更すべきでない所まで変更されていないのかを確認するために、新旧パッケージ画像の記載内容の差分を出力。
研究部門→全社	インタビュー設計・分析	製品・サービス開発の初期プロセスである、インタビュー業務効率化を支援する。インタビューの対象物や達成したいことなどをもとにインタビューの設計を提案したり、インタビューの発言録をもとに分析したりすることが可能
SCM部門→全社	業務フロー整理	既存の業務フローを見直すために、目的や業務概要をもとにステップに切り分けて詳細に言語化し整理した結果を提案する。各ステップでユーザーからフィードバックを得ることで実情に沿った内容に仕上げることができる

完成度の高い参加者は日常的な生成AI活用に加え、初期段階で業務フローを分解し置き換え箇所を明確化してた

研修結果

ツール完成度

80%※

効率化時間

84時間/年※※

研修満足度

4.4/5点

利用継続率

91%

※ 参加者全体の平均値
※※ 完成したツールの平均値

得られた示唆

示唆① ローコードでも慣れは必要

ローコードで実行できるため非エンジニアでも開発可能ではあるが、ワークフローの組み方や、RAGやプロンプトエンジニアリングなど生成特有のスキルは、想像以上に参加者が躓きやすいポイントだった。

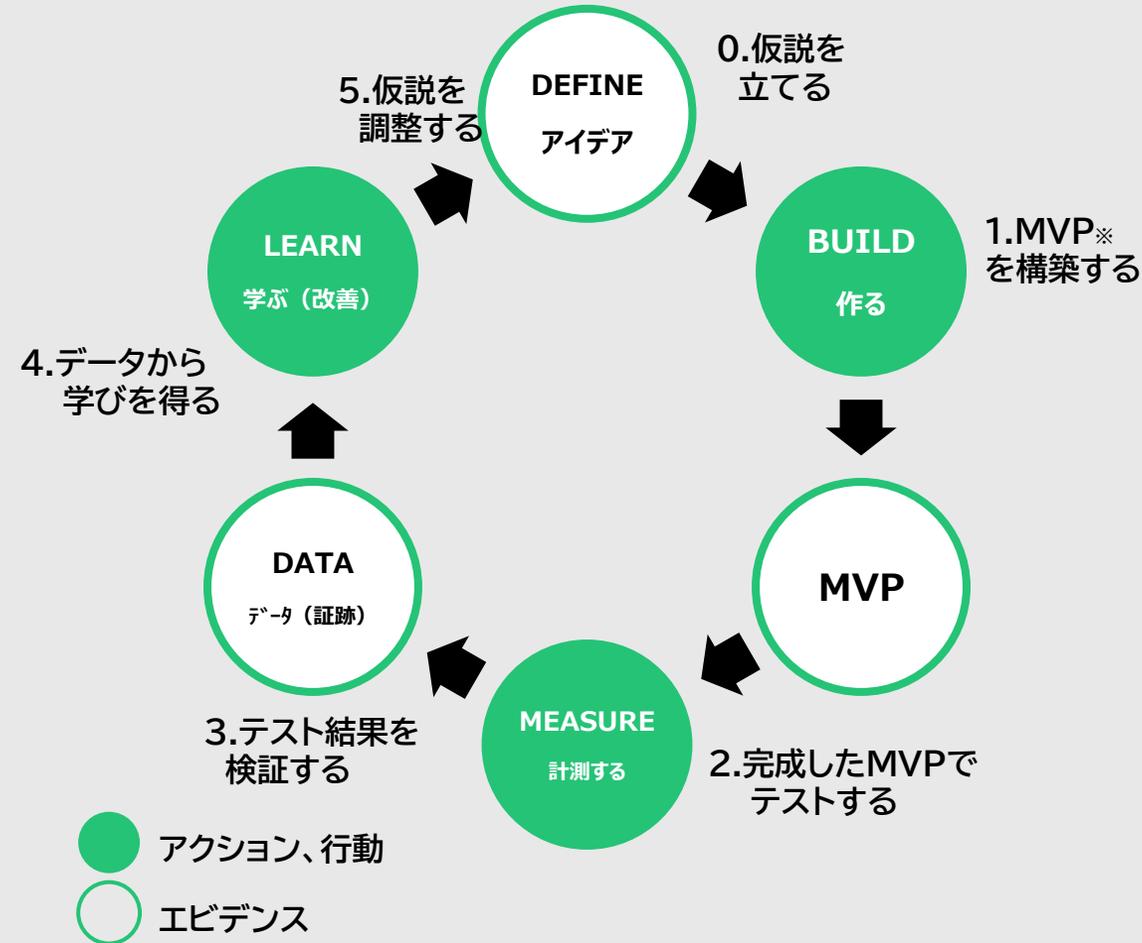
示唆② 完成度が高い参加者の特徴

普段から生成AIを利用して、生成AIの使いどころを理解していることが必須。

また特に完成度が高かった参加者は、前半の業務フロー整理をしっかり行い、どの部分を生成AIに置き換えるかが明確だった。

作る前に“解く”——課題設定が成果を決める

リーンスタートアップのように、まずはツールに慣れる、
作ってみることの反復も大事ではあるが…

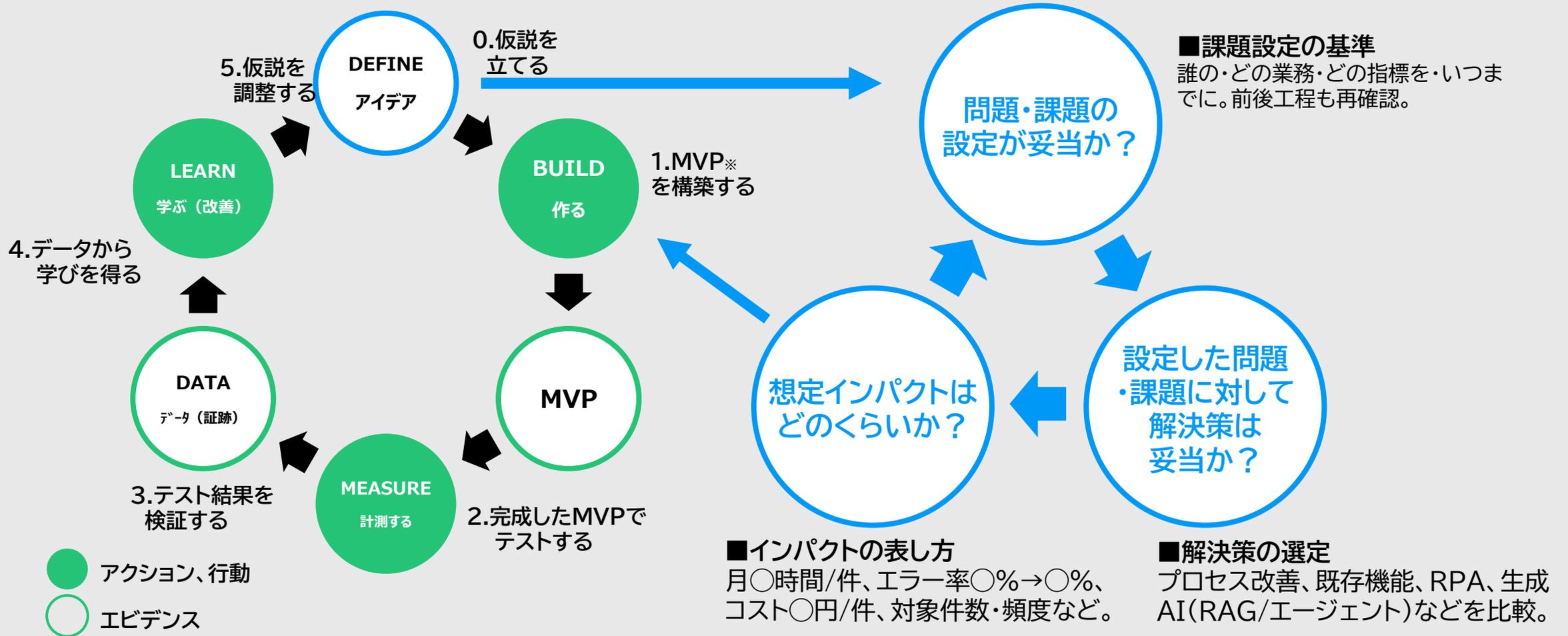


※MVP: Minimum Viable Product=必要最小限の機能で価値仮説を検証する試作

「リーンスタートアップ」: エリック・リースから引用し改変

作る前に“解く”——課題設定が成果を決める

アプリをすぐに作るより、業務の分解・課題の定義・手段の比較・測定設計を丁寧に行ったチームほど、最終成果物の完成度が高い



※MVP:Minimum Viable Product=必要最小限の機能で価値仮説を検証する試作

「リーンスタートアップ」:エリック・リースから引用し改変

Inputs

継続学習の仕組み化



従業員の活用レベル
に応じた段階別教育
を継続的に実施

Outputs

マイクロユースケース量産



小規模ワークフローやエー
ジェントを短サイクルで実
装・評価し、標準化し横展開

エージェント連携



API/RAG/ワークフロー
を共有し、複数エー
ジェントをつないで業務を自動化

AI-Readyデータ基盤の整備



活用を前提にデータを継続取得・整備
(定義・品質・メタデータ・権限標準化)

Outcomes

創出時間の再投資 による新価値創出



生まれた時間を「お
客様のより良い習慣
づくり／健康価値」
へ再配分

LION DIGITAL TRANSFORMATION PROJECT

ご清聴ありがとうございました

今日を愛する。
LION LDX



オンライン名刺